

緊急特集 **「安楽死」** を考える!

ネットを通じて世界に「安楽死」を宣言したメイナードさん  
(The Brittany Maynard Fund) サイトより



読者アンケート  
**余命6カ月と言われたら**

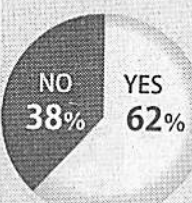
# 「安楽死を望む」か

# 62%も!

脳腫瘍のため「余命半年」と診断されたアメリカ・カリフォルニア州の女性・ブリタニー・メイナードさん(29)は、安楽死が合法とされているオレゴン州へ移住し、「11月1日に、家族に見守られて死にたい」と、インターネットを通じて全世界に宣言した。1人の女性のこの決断が、世界中の人々に、「死とどう向き合うか」という問いを投げかけている――。

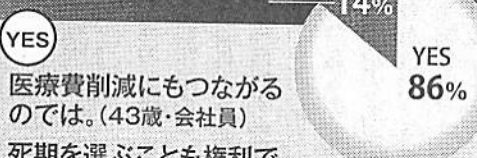
## 安楽死 アンケート結果

**Q1** もし自分の余命が半年以内だとわかったとき、可能であるならば「安楽死」を望みますか?



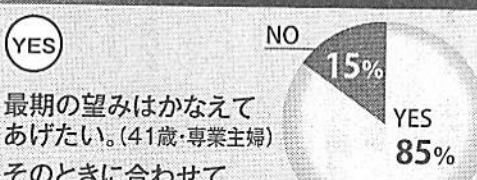
- YES** 家族に苦しんでいる姿を見せたくない。(43歳・会社員)
- YES** 苦しみよりは眠るように死にたい。(30歳・パート)
- YES** その日を決めて生きることで、生き方が変わると思う。(39歳・専業主婦)
- YES** 残す家族に経済的・精神的負担をかけたくない。(48歳・会社員)
- NO** もっと生きられる可能性を信じたい。(43歳・専業主婦)
- NO** 夫と1日でも長く一緒にいたい。(32歳・専業主婦)

**Q3** 日本では未整備の「安楽死」制度。今後、日本でも認められるべきだと思いますか?



- YES** 医療費削減にもつながるのでは。(43歳・会社員)
- YES** 死期を選ぶことも権利であって、認められるべき。(43歳・会社員)
- YES** 死にたいほどつらい状況で生き続けるのは気の毒だと思う。(32歳・専業主婦)
- YES** 残された人の心のケアを徹底する制度が確立できるなら。(43歳・パート)
- NO** 制度が悪用されることもあるのでは。(45歳・パート)
- NO** 自殺を助長することにならないか心配。(42歳・専業主婦)
- NO** その制度に従事する人への負担が大きすぎる。(34歳・専業主婦)

**Q2** もし余命が半年以内だとわかった家族が「安楽死」を望んだとき、可能であるならばそれに応じたいですか?



- YES** 最期の望みはかなえてあげたい。(41歳・専業主婦)
- YES** そのときに合わせてなるべくたくさんの仲間を集めてあげたい。(38歳・パート)
- YES** 納得いくまで話し合えたなら。(44歳・自営業)
- NO** あらゆることを試してみたい。(54歳・専業主婦)
- NO** 大切な人の命を絶つことはできない。(35歳・専業主婦)
- NO** 自然ではないことはさせたくない。(49歳・パート)

メイナードさんが主張した、「死を選ぶ権利」について、女性たちはいったいどう考えているのだろうか。  
本誌は読者100人(30〜50代既婚女性)を対象に、4項

目にとつたる「命」に関する緊急アンケートを実施。その結果は、実に6割以上の人が、できることなら安楽死を望み、8割以上の人が安楽死制度に肯定的というものだった。

寄せられた回答から、残される家族への深い愛情、痛みや苦しみに対する恐れ、生きることへの執念……、女性が抱くさまざまな思いが浮かび上がってきた――。

Part 1 本誌読者100人緊急アンケート  
**日本でも安楽死制度を認めるべきですか?**

アメリカ人29歳末期がん女性の「11月1日、私は死ぬことにした」に世界中が騒然!

アンケートは次ページに続きます

**Q4** もしあなたが「余命半年」と告知されたとき、それからあなたはまず何をしますか？

家族と旅行に出かけたい。  
(34歳・パート)

とりあえず泣き疲れるまで泣きたい。(43歳・パート)

残された家族に不自由がないよう準備したい。  
(55歳・専業主婦)

子どもたちの成長記録を整理しておきたい。(43歳・専業主婦)

恩師など、お世話になった方のお墓参り。(59歳・パート)

なんだかんだで、いつもの暮らしをすると思う。(34歳・専業主婦)

# Part 2 世界の「安楽死」事情最前線！ 制度化された国は世界でわずか5カ国だけ！

「オレゴン州は、アメリカでも最初に医師による自殺ほう助を合法化した州です」  
こう話すのは、日本尊厳死協会事務局の白井正夫さん。

「97年に法律が施行されて以来、オレゴン州では72人が医師から致死量の薬物を処方され亡くなりました。とはいえず法の乱用を避けるため、最低2人の医師から診断を受け、また致死量の処方を受ける回数、医師に要請しなくてはならないなど、多くの手続きを患者に課しています」

この法律、「オレゴン州尊厳死法」というのだが、日本尊厳死協会が法制化を目指している尊厳死とは決定的に違う。同協会の尊厳死には、医

師による「自殺ほう助」は含まれていない。そもそも、尊厳死と安楽死の違いとは？

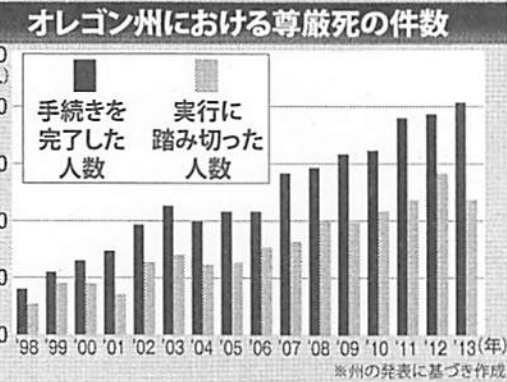
同協会では尊厳死を「不治かつ末期の病態になったとき、自分の意思で無意味な延命措置を中止し、人間としての尊厳を保ちながら死を迎えること」と定義している。一方、安楽死は複数に分類される。「尊厳死は消極的安楽死とも呼ばれ、これは延命措置の中止だけで、患者を直接死なせる行為はありません」

激痛を除くために麻薬を投与した結果、患者が永眠してしまうのが「間接的安楽死」。そして、もう一つ「積極的安楽死」と呼ばれるものがある。「末期症状の患者が苦痛から逃れるため死を希望し、望みを受け入れた医師が患者の生命を短縮させるため致死薬を注射するなどの措置を行うことを積極的安楽死と呼びます」

3つの州と同様の法律が施行され、現在準備段階の州もある。そして今では、医師のほう助を受けての自殺も尊厳死というアメリカ発の新しい概念が広まりつつあるのです」

一方で、積極的安楽死を合法化した国もある。「01年にオランダが、医師が手を下す安楽死も認め、その後、ベルギー、ルクセンブルクが続きました」

ベルギーは患者の年齢制限をなくす法案が今年国会で可決、子供の安楽死も合法化されることに。フランスでは現大統領が医師による自殺ほう助の合法化を公約でうたった。



「末期症状の患者が苦痛から逃れるため死を希望し、望みを受け入れた医師が患者の生命を短縮させるため致死薬を注射するなどの措置を行うことを積極的安楽死と呼びます」

「スイスの刑法には「功利的な自殺ほう助は罰せられる」とあるのですが、これを裏返しに解釈し、功利的でない自殺ほう助は罰せられない、という理屈で、法律がないまま、複数の支援団体が終末期の患者の希望を受け、自ら命を絶つ手助けを行っているのです」

## 安楽死または自殺ほう助が合法とされている地域



「患者の意思を尊重する考え方は広く受け入れられてきましたが、それでも尊厳死反対の意見は根強く、なかには延命措置を止めることを躊躇される医師も……。そこで、私たちは尊厳死法の成立を訴えているのです」

余命いくばくもないと診断された患者さんが「尊厳死を持って生き、最後は寿命のままに死にたい」と願ったとき、きちんとした法律が、医師が患者の希望に応じる後ろ盾となるはず、そう考えているのです」

Part 1 現役医師が語る日本の「在宅終末期医療」  
「自宅です」くなる方は、みなさん穏やかな顔をしています



最近では、患者本人が延命治療を拒否し、人間として尊厳を保ちつつ死を望む宣言書「リビング・ウィル」や、終末期の医療「ターミナル・ケア」という言葉も浸透しつつある。99年、介護保険制度の制定以前から、こうした治療困難な患者を自宅で最期までケアする「在宅終末期医療」に取り組んできた中村クリニック（大阪）の中村俊紀院長に、現場の医師の声を聞いた。「家で亡くなる方は、みなさん穏やかな顔をしています」

「医師と訪問看護師、精神科医、ケースワーカー、カウンセラーも所属し、ケアマネジ

ヤーと連携して、24時間診療体制を確立している。中村クリニックは現在、在宅患者40人をケア、これまでに看取った人は約400人を数える。「健康で痛みのない人生を見守っていくのが私たちの使命です。『安楽死』と、『尊厳死』はまったく意味が異なりますが、正確に理解している人は少ないですね。私は『自然死』というか、みんなが穏やかになじみのある自宅で家族に囲まれて、自然な死に方ができればいいなと思っています」

「高齡化に伴い、『老々介護』から、最近では『認々介護』や、独居高齡者のケアも増えた。負担を減らすため、患者の家族には介護の情報を提供し、毎回『無理をしないで。自然体でいい』と声をかける。痛みのケア方法、亡くなる直前に起こりうることも家族に事前に伝えておく。」

「みんな生まれて、生きて、病気になるって亡くなっていくのです。『死を特別視しないですね』と伝えます」

「自宅です」できることは増えていると、中村医師は説明する。「以前は、患者さんは、『痛みに耐えられず苦しむ』と言われていましたが、今では多くの痛みは薬で抑えられます。耐えられないほどの痛みは、あまりありません。家族の方がいると、患者さんは安心して、穏やかに過ごせます。自宅は最高の特別室、なのです」

「90代の末期がんの男性がいた。ご飯は食べられないが、焼酎はやめなかった。『人生の最後の楽しみを奪うのもよくないと、『栄養剤を焼酎で割って飲んだら』と、酒をとめませんでした(笑)』家族に迷惑をかけるのが忍びないと、『入院させてくれ』と言いたす人も多いそうだ。『本人の希望ならいいのですが、家族に気兼ねしている人も多い。ご家族の方には、患者さんの意思をきちんと確認するようお願いしています』

「しかしときには、介護に疲れた妻が、夜の間に救急車を呼んで末期の夫を入院させてしまうケースもあるそう。『私たちが本人の意思を確認する間もありませんでした。女性が末期のときは、自宅で過ごせることが多い一方で、男性は病院へ行くことが多い。これは『高齡の母に父の介護の負担をかけたくない』という、お子さんの気持ちも反映している気がします』

「若い人が死を迎えるときには、残す相手のことを気遣う」



「特別死を認めること」は、ありませんと語る中村院長

「苦悩やつらさも感じるといいます。中村医師のチームは、患者が亡くなった後、通夜や葬式に出席しお参りし、思い出話をするようにも心掛けています。今、中村医師は99歳の女性の看取りの真っ最中だ。『元医師の女性で、末期がんで食欲もなく、栄養剤の点滴も拒まれて、『このまま死んでいきたい』と希望されました。70代の娘さんと話をして、本人の意思を尊重することにになりました。あと数日で旅立たれると思います。こんなふうに、ご自分で人生を決めて最期を迎える人は、とても印象に残ります』

「余命数日と判断したときにも、必ずおこなうことがある。『ご家族やみなさんとちゃんとお別れができるように、最期に会える人は呼んであげてね』と、伝えていきます。『許諾』……本人もご家族も、死を許諾して迎えられるならいいなと、そう思います」

「誰しも迎える、そのとき。1人の問題ではないからこそ、私たちは大切な人と、それぞれ意思をしっかり確認し合っておくべきだろう。」

「スイスの自殺ほう助団体『ダイグニタス』って？」

「安楽死を求めて、スイスを訪れる外国人が後を絶たないという。彼らが目指すのは、98年にチューリッヒ郊外に設立された非営利の自殺ほう助団体『ダイグニタス』。ほう助を希望する人は、80スイスフラン（約7千円）の年会費を払い、会員になる。診療記録の詳細なチェック、さらなる費用の支払いなど手続を経て、最終的に医師の了承を得た後、自殺の手助けを受けることが認められる。ダイグニタスのほう助を受けて安楽死に至った人の数は、ここ10年で千人以上におよぶ。09年には、当時聴力や視力の悪化に悩んでいた英国の著名な指揮者であるエドワード・タウンズ氏が、末期がんを患っていた妻と共にダイグニタスでの安楽死を選択し、話題となった。」

「スイスが自殺ツーリズムを受け入れる国として批判にさらされるなど、ダイグニタスの存在意義を問う議論はいまなお絶えない」。



ダウンス氏夫妻が最期を迎えた郊外の家屋。この一件に関して、英国内でも議論が過熱。